様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：３２６３５
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１２２９４

研究課題名（和文）『源氏物語』第一部を中心とした「引歌」の研究

研究課題名（英文）A Study of "Hikiuta" in The Tale of Genji, Part I

研究代表者
古田　正幸（Furuta, Masayuki）

大正大学・文学部・准教授

研究者番号：１０６４４６３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本の平安朝の文学作品である『源氏物語』における「引歌」表現の研究を行ったものである。「引歌」とは散文部分において特定の古歌を想起させる技法のことで、本研究では『源氏物語』冒頭部から従来指摘がない箇所も含めた引歌表現の検討を行い、特に葵巻巻末近くの「春や来ぬる」の引歌として、従来指摘がなされていなかった『三条右大臣集』や『兼輔集』所収歌である「みやこには見るべき君もなき物をつねをおもひてはるやきぬらん」を新たに指摘することが出来た。また、若紫巻の葵の上の台詞「とはぬはつらきもの」には、会話文における光源氏の引歌に対する反応から、特定の引歌を想定すべきではないことなどが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
『源氏物語』の引歌表現の解明は、物語の叙述方法を明らかにし、従来十分に解釈出来ていなかった箇所の読解につながるものといえる。また、日本の文学作品同士の関係を究明するものでもあるので、文学史的な意義もあり、日本語の表現の豊かさを明らかにするものとも考えられる。『源氏物語』は世界的にも高い関心が持たれている作品でもあるので、その表現効果を明らかにすることは、日本の文学や文化の紹介としても有意義と考える。

研究成果の概要（英文）：This study examines the use of "Hikiuta" in "The Tale of Genji", a literary work of the Heian period in Japan. In this study, we examined the technique of "Hikiuta" in the beginning of "The Tale of Genji", including some parts that have not been pointed out before. In particular, as the Hikiuta of "Haru ya kinuru" near the end of the Aoi volume, we found a new Hikiuta, which has not been pointed out before. We were able to newly point out "Miyakoniha mirubeki kimi mo nakimono wo tsune wo omoite haru yakinuran" a poem from the ""Sanjo-udaijin Shu" and " Kanesuke Shu". In addition, the response of Aoi no Ue to Hikaru Genji in the Wakamurasaki scroll to the line, "Towanu wa tsurakimono" in the conversational text, revealed that a specific Hikiuta should not be assumed.

研究分野：平安朝文学

キーワード：『源氏物語』　引歌　和歌　『源氏釈』　『古今和歌六帖』　『多武峯少将物語』　『三条右大臣集』　『兼輔集』

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は『源氏物語』などの平安時代中期の物語作品における「引歌」を対象とする。「引歌」とは、散文部分に古歌の一節を引いて、その古歌の引かれない部分の歌句や詠歌の背景を想起させる技法をいう。

(1) 和歌文学研究の進展にともなう本研究の背景

平安時代の和歌文学研究は、とくに私家集(歌人ごとの個人の和歌集)の分野で本文の紹介や、本文校訂、注釈作業が飛躍的に進んでいる。また、データベースの整備も急速に進んでいる。引歌の被引用文献たる和歌集の本文の整理と精査とに基づいた引歌の見直しを行う必要がある。

(2)『源氏物語』の引歌研究をふまえた本研究の背景

従来の引歌研究は、『源氏釈』以来に指摘済みの引歌〝候補〟の中から、何を選ぶのかといった議論に終始する傾向があるように思われる。全体的な見直しをはかった玉上琢弥「所引詩歌仏典」は 1960 年代の仕事である。前項で述べたように、データベースの整備が進んだ今、『源氏物語』の引歌を、全体として再調査する余地がある。

(3) 物語作品における引歌研究をふまえた本研究の背景

「引歌」の指摘は『源氏物語』以外の散文作品にも多く見られるが、「引歌」の引き方について、網羅的に検討して、個別の作品の特徴を指摘した研究は多くない。本研究は『源氏物語』第一部を中心として研究を行うが、他作品の引歌の引き方をも視野に入れて検討する必要がある。

２．研究の目的

本研究の目的は、平安朝の私家集を含めた歌集の本文と『源氏物語』第一部の本文を精査したうえで、引歌全体を再検討することである。本研究でいう第一部とは、いわゆる三部構成説における、桐壺巻から藤裏葉巻までを指すものとする。ただし、それらの巻までの表現の分析においては、当然のことながら第二部以降や、他作品を含めた語彙用例の検討を含む。

検討を通じて、以下の 3 点を目的とする。

(1) 従来説にとらわれない、新見を含んだ引歌の指摘

『源氏物語』の引歌の指摘には、平安時代末期の『源氏釈』から数えると 800 年以上の歴史があり、かつその間に積み重ねられてきた指摘にも膨大なものがある。引歌の指摘がない箇所も含めて、引歌の指摘が出来ないか、模索していく。

(2) 本文研究の成果をも踏まえた、引歌の従来説の再検証

引歌として引かれうる歌集の本文と、『源氏物語』の本文とに本文異同があっては、引歌の指摘が正確なものにならない恐れがある。近年の本文研究を踏まえて、広く作品の本文を収集したうえで、引歌の分析に取り組む。

(3) 引歌の指摘、再検証を通じた『源氏物語』の新解釈の提示

引歌が指摘できれば、『源氏物語』の解釈が改まることになる。『源氏物語』研究の成果を批判的に踏まえて、新たな指摘を行っていく。

３．研究の方法

本研究では、以下の 3 点を主たる分析方法とする。

(1) 被引用文献たる歌集の本文異同と、『源氏物語』の本文異同との把握

研究の準備段階として、被引用文献たる歌集と『源氏物語』の本文とを付き合わせやすいように整理する。

(2)『源氏物語』の本文と歌集の本文とを付き合わせた引歌の検討

従来説にとらわれずに、『源氏物語』と歌集の本文とを丹念につきあわせて、引歌を検討していく。そうした過程で出て来た引歌と断定できるものについては論文化していくものとするが、引歌候補に留まる場合についても、将来的には引歌候補としての公表を企図していく。

(3) 引歌の検討結果を踏まえた、『源氏物語』の解釈の検討

(2) を踏まえて、引歌の指摘から『源氏物語』の解釈を検討する。

４．研究成果

本研究では、『源氏物語』第一部を含む引歌の検討を行う中で、次のような成果を得てきた。

（1）『源氏物語』葵巻における新たな引歌候補の指摘と、『源氏物語』の解釈の提示

『源氏物語』の葵巻巻末における光源氏が大宮に送った消息文に「春や来ぬるともまづ御覧ぜられになむ、参りはべりつれど、思ひたまへ出でらるること多くて、え聞こえさせはべらず。」との一節がある。従来、『源氏釈』所収の「あたらしくあくることしも(をイ)ゝもとせのはるやきぬるとうぐひすの(そ)なく」が指摘されて、現行の諸注でも踏襲されている。

本研究では、『源氏釈』所収歌が和歌として不自然であり、紀貫之の詠歌を改作したものである可能性を指摘した。

そのうえで、「春や来ぬる」および同様の語構成となる「春や来」＋助動詞「ぬ」の活用形が該当する歌句を探した結果、新たに「みやこには見るべき君もなき物をつねをおもひてはるやきぬらん」（『三条右大臣集』31 番歌、『兼輔集』Ⅰ115 番歌（二句「見るべき人も」、四句「つねに思ひて」）などに所収）の藤原定方の詠歌が、醍醐天皇を哀傷する歌として、葵の上を亡くした『源氏物語』の文脈に合致する引歌と認定できることを見出した。

また、この引歌の指摘を踏まえると、葵巻巻末における光源氏と大宮の贈答歌の表現が、藤原定方と藤原兼輔の一連の贈答の中にある、「なく涙ふりにし床の衣手はあらたまれどもかはらざりけり」（『兼輔集』Ⅰ114 番歌）を踏まえたものであること、光源氏が大宮から受け取った消息文の「昔」と「今」の対比が、やはり藤原定方と藤原兼輔の一連の贈答の中にある「いたづらにけふやくれなばあたらしき年のはじめは昔ながらに」（『兼輔集』Ⅰ113 番歌）の発想に通じることをも指摘できた。

上記の指摘を踏まえることで、従来の『源氏釈』歌を引歌とする諸注では、光源氏自身が鶯に喩えられるといった指摘に留まっていた葵巻巻末の解釈の見直しも可能となった。藤原定方と藤原兼輔は、『源氏物語』作者とみられる紫式部にとって、共に曾祖父にあたる。藤原定方と藤原兼輔が醍醐天皇を悼むことの背景には、もちろん個人的な悲痛を認めることが可能であるが、醍醐天皇が後ろ盾であったことを考えると、家の浮沈がかかった悲嘆でもあったと考えられる。一方、『源氏物語』の左大臣家にとっても、一人娘の葵の上を亡くす悲痛は、光源氏との結びつきを消失する悲嘆にも繋がってくる。その際に、光源氏が「春や来ぬる」と引歌を用いることは、定方と兼輔の家、ひいては作者の家とは異なり、光源氏は左大臣家の悲痛の解消に努めようとしている誠意の表れと捉えることが出来る。葵巻巻末時点では、光源氏の考え一つに支えられたこの誠意は、澪標巻で光源氏が左大臣を政界に復帰させる展開に連なる文脈として把握できる。

本研究の成果は、「『源氏物語』葵巻巻末の和歌表現―「春や来ぬる」の引歌を中心に―」と題して、『文学・語学』 223 号（2018 年 11 月、査読有）に公表した。

（2）『源氏物語』若紫巻における引歌の再検証と『源氏物語』の解釈の提示

『源氏物語』若紫巻において、光源氏を相手にした葵の上の会話文に「とはぬはつらきものにやあらむ」という台詞がある。従来、この箇所には『源氏釈』所収の「君をいかで思はん人にわすらせてとはぬはつらき物としらせん」が引歌として指摘されてきたが、この歌が出典未詳であること、葵の上が会話文でこの歌を引いていると考えると、「弱みを見せすぎた」（『源氏物語評釈』）といった指摘があり、葵の上の台詞の後の光源氏の反駁と十分に文脈上つながらない問題ある。他の先行研究が提示した引歌候補でも全く同様の問題が生じる欠点があった。

本研究では、網羅的に引歌の分析を行ってきた成果を踏まえて、女性の会話文で引歌を用いて光源氏に切り返してきたときに、光源氏がどのような反応を見せているかに着目した。具体例として、夕顔、末摘花、紫の上、玉鬘の四名の女性が引歌表現を行った際に、光源氏もまた引歌表現で返していること、ただし、玉鬘の例のように、相手の女性の反発の度合いによっては、同じ引歌を踏まえて正面から反論することもあり得ることが確認できた。

こうした傾向は、光源氏が和歌を踏まえた機知のある人物造型として描かれていることを意味していると考えられる。ひるがえって葵の上の台詞に対して、光源氏は引歌による切り返しを全く行うことが出来ていない。光源氏は葵の上の台詞に引歌としての含意を認めずに、より切迫した反論を試みていると考えられ、狭い意味での引歌を認定する必要がない例と認められた。

『源氏物語』の解釈としては、光源氏が「問はせたまはぬ」（病気の加減はいかがですか）と問うてもくれないと葵の上をなじったことに対して、葵の上が「問はぬはつらきものにやあらむ」（質問しないことはつらいことであるのでしょうか）という表面上のニュアンスと「訪はぬはつらきものにやあらむ」（光源氏が訪れないことはつらいものであるのでしょうか、私はつらくありません）という主旨を含んでいるために、光源氏は「訪はぬ」方に反発せざるを得なくなり、窮地に陥っていることを指摘できた。

本研究の成果は、「『源氏物語』若紫巻における「とはぬはつらきものにやあらむ」考―光源氏の会話文における引歌理解を中心として―」と題して『むらさき』57 号（2020 年 12 月、招待有）に公表した。

（3）『源氏物語』以前の引歌表現の検討と引き方の特徴に関する指摘

『源氏物語』の引歌の特徴を指摘するにあたっては、『源氏物語』以外の作品における引歌の諸相をも検討していく必要があるため、本研究では並行して『かげろふ日記』『うつほ物語』『多武峯少将物語』の検討も行ってきた。

その結果として、従来「この物語では、地の文にも歌が引かれているケースが多い」と指摘されてきた『多武峯少将物語』に関して、広く引歌候補を認めた場合であっても、消息文六例、会話文一例の全七例に留まり、いわゆる地の文に引歌が一例も認められないことを確認することが出来た。また、消息文と会話文においても引歌を用いているのが高光室の周辺に限られることも明らかにすることが出来た。さらには、会話文の一例が高光室の詠歌に直接踏まえられており、詞書に記されても良いような作歌事情と密接に関わることも確認した。

こうした傾向からは、『多武峯少将物語』の引歌が、物語作者の創意ではなく、高光室に関する消息文や詠歌に関わる資料が引歌の出典となっていることが想定出来た。このことを『源氏物語』の引歌と比較すると、誰もが引歌表現を使いこなすことが出来たわけではないという、当時の引歌事情の一端を知ることが出来る。

上記のうち、『多武峯少将物語』に関する指摘については、「『多武峯少将物語』における消息文・会話文の引歌について」と題して、『武蔵野文学』69 号（2021 年 11 月、招待有）に公表した。

（4）その他

引歌の候補については従来説も含めて蓄積が出来ているので、今後は第二部以降などに精査の対象を広げることで、さらに研究を進めていくことが出来る。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 古田正幸	４．巻 57
２．論文標題 『源氏物語』若紫巻における「とはぬはつらきものにやあらむ」考―光源氏の会話文における引歌理解を中心として―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『むらさき』	６．最初と最後の頁 36-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 古田正幸	４．巻 223
２．論文標題 『源氏物語』葵巻巻末の和歌表現―「春や来ぬる」の引歌を中心に―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『文学・語学』	６．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 古田正幸	４．巻 69
２．論文標題 『多武峯少将物語』における消息文・会話文の引歌について	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『武蔵野文学』	６．最初と最後の頁 26-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関